



大恩堂 清 涼

▼お二階のお座敷にてお嬢様のお花をお挿けおぼしけるを、光線の工合も至極よろしうにお座りすればとお隣の婆やが注進、さらば参上御目もじと早速に萬端取揃へて出でける若物こそ、豫て心の有礙深き思ひを誰か汲むらん、儘に成る物ならばこちらの胸を向ふへ寫す器械の欲しければ、戀に心も暗箱のスリ硝子に焦點を合せけるに、是でよくつてご耻かしげなる娘の風情、もう少しやおあとへいけませんですか、イ、エ夫なれば私の方で退りませうと一ト足、二ト足、南無や三の足を踏はづし、後ろに目のなき悲しさには例の黒い裂を冠りし儘、畢絨諸共階子段をスツテン



コロリ、ドタ〜パタン、器械の音がガタリカチヤン、打ち所や悪しかりけん夫より日々接骨醫へ通ふを知らぬ顔も成らず、婆やが計らひにて風月堂の菓子折見舞物として送られたるに、若き男は忝く押載だき、何れ全快の上はお禮寫しに伺ひ升▼會主は持丸の大旦那にて素人義太夫の催しあり、切には朝顔日記を大井川迄出す筈なれ共、随分長き事故中程を少し抜かんとて手筈は充分に整ひしが、やがて其席に臨みし時は一切夢中と成りて打合せし事も忘れ果て、只々語り續くるを、師

匠は三味線を弾き乍ら小聲にて、「そこを飛んで〜」と教へたるに、大旦那はハタと行詰りて留くはためらひしが、再びソコを飛ぶのですよと言はれ、今は何の考へも出でず、ぬつくど立上りて見臺を蹴飛ばし、高座より詰込みたる聴衆の中へ飛び下りけり、

▼至極買喰ひを好む小僧あり、され共小遣錢の不自由なるは是を如何共致し難く、遂に紙屑やを語らいて胴着を拂ひ、股引を賣り、或る時は下帯をも些少の金に替へて、僅に口腹を満たしつゝありしが、一日主人の供にて道ゆく途中を此屑やに出遇ひ「今日は」の挨拶至極丁寧なりしかば、小僧は一ト方ならず狼狽して、「無いよ〜」



▼素人芝居にて千代萩の床下を出す、男之助を勤めしは去る洋酒の主人、型の如くの扮装にて鼠ふんまへ鉄扇を目に覆ひてセリ上り、成田屋ア、親玉ア、日本一などの賞言葉は何れお出入の追従なるを、大將はのぼせ上りて白を忘れたり、中には確かりしる、ごうしたんだと呼ぶもあり、男之助は猶無言なり、見物の聲はいよ〜かしましきに、今は致方なく鉄扇振上げ物をも言はず方に任せて鼠の尻を撲り付けぬ、鼠は不意の出来事に面喰ひて一散に花道へ逃出し、誤つて仁木の出づべき切穴へ飛込みしかば、下に待ちし彈正は叱驚仰天度腹を積かれ、スツボンよりは徒らに白き煙りの立昇るのみ、ア、ラ怪しき事共哉、仁木彈正遂に出でず、かしこの男の助未だ形を改めず、

▼龜井戸天神の初卯に参詣と云ふは附たりの、實はよき圖もあらばどの野心にてブレモカメラを小脇にかい込み、天神様へと差かゝる折しも、屋根橋へ登らんとする所なり、今日の獲物は是なんめりと早速に瞬間撮影を呉れて歸り、其夜現象の結果は誠によろしく嬉しければ、又々是を引のばして見るに、今までは心付ざりしが船頭のこちら向きて川の中へ小便を垂れつゝあるも寫りぬ、

▼當春の事なりし或乾物やの主人店先に在りて玉子の數を讀みける折から、年頭の客來りてそれに挨拶をなせしものから、今まで讀みたる數を忘れ、更に又一二ウ三イと始めける所へ、再び年賀の來客あり、本年も亦た相變りませす云々ありてそれを返し、チッーイニウ三イ

▼酒と名の付きし物は一滴も喉へ通さず、奈良濱乃至屠蘇おこしにて顔を赤くする男の、昨日はもうズツト度胸を据へてからに、前後忘却する覺悟で飲みましたと云ふに、それは近頃珍らしき事、シテ〜何合位と尋ねれば、思ひ切つて猪口に一杯



大師まゐり 柳亭燕路

「イヤち早う、講義は昨日は上天氣で出かけたけれど、どちらの方へお出でした。」
「ヤ、これは中さん、さあお上りなさい、昨日ですか〜、昨日は、お友だちに誘はれてまして梅見がてら、大師へ参詣して来ました。」
「それや結構でしたな、西荒井でしたか、川崎でしたか。」
「川崎へゆきました。」
「ハアそうでしたか、同じ大師でも西荒井から見ると、川崎の方がズツと人出が多いやうですな、景氣はどんなもんでしたか。」
「イヤどうも出ました、出ました。」
「昨日は日曜でしたか。」
「そうです。私は講義にはいつてるので、あつて講義中に一緒になるつもりで約束したので、おほきに都合がよろうでしたか、えらい人出でした。」
「して貴兄の方の講義は何さいふ名の講義です。」
「左様大講義さあもしらぬ講義ですな。」
「へー大講義さあもしらぬ講義ですな。」
「そうです、高い聲でやはいはれませんが、お百のよりあつまりです、外に風情はありませんや、たゞ大師様を拜むと、

物を食ふのが、樂みなので、大食の奴はり揃つてこせへた講中なので、それで大食講といふのでよ。」
「ヤ、そいつは悪質な講中ですな、大食講はようこそな、ちや定めし御座るは意外に出ましたらうな、



「それがさ、ビールと蒸のすいたたらうちやありません。」
「イヤ〜あつてですな。」
「まあ私の考へぢや、大師様だから、御蒸ちやビールだらうとでもいふのでせう。」
「ハ、こいつはあもしろいお茶番ですな、それで外の食物は、何がありますか。」
「エ、昨日の講でへものは不思議ぢやあせんか、大講義で生臭いものは一切ないはずなのに講義がしやれた人物で、歸りは蒲田の梅見といふ、趣向で此講に隠し肴を一ツついておます、そいつは肴の上から、蒸かかぶつてあるから、中はわかりません、でこの肴はビールを持って、大師をはなれてから、梅見の場所で一メイやうと、かうゆう趣向なんです。」
「ハアそいつは思ひ付けたな、肴は一体何でせう。」
「それがさ、肴なんだから、お蒸ちやあられませんが、そつくりもつて外へ出てから、あけて見たんです。」
「へー、それで肴はなんですか。」
「面白いぢやあせんか、講義で〜奴は、よつぽど、しやれた奴なんです、處々大師様だけに、肴は、ほう〜の鹽漬なんです。」